

おきのゐて身を焼くよりもかなしきは都島への別れなりけり

小野小町

「熾火が胸の上に居座っていてわたしの身を焦がすのよりももっと悲しいのは、京の都と島という僻地に遠く隔てられてしまう現実の別れでした」。

藤原定家が『古今和歌集』伝本の校訂をした時、墨が引かれていた十一首を切り出して、巻末にまとめた「墨滅すみけち歌」の中にある作。もともとは巻十「物名」(物の名前を詠みこむ)に置かれていたもので、詞書には「おきのゐみやこしま」とある。場所は全く不明だが、おそらく島の名前だと思われる。

初句「おきのゐて」に目が留まる。熾火が胸の上に居座るとは、どのような状況なのだろう。まず考慮しなければいけないのは、「熾火」の意味が今と当時とは異なる点。現代では、着火した薪や炭が炎をあげずに芯の部分だけが赤く燃えている状態を言う。けれど、当時は盛んに燃えている

火の意味があったらしい。自らを苦しめる恋情の火という解釈になるだろうか。

さらには「ゐて」の言い回しにも違和感がある。熾火が「ある」ならわかる。しかし「ゐて」なのだ。ここには仏教の苦行の一つである焼身行が源に意識されている可能性があるという。『法華経』に薬王菩薩が焼身やくわう、焼臂しやうぶ(ひじを焼く)供養を行う話がある。ほかにも中国の高僧が身体を火で焼きながら説教をし、骨肉がすべて焼き尽くされたのち心臓だけがあかあかと残ったという有名な話など、焼身行の話は説教の席などでさまざまに語られてきたはずで、だからこそ「おきのゐて」の言い回しが生きる。

小町の火の詠いかたは独特で、男の尽きない気まぐれや心変わりに嘆きつつ心を燃やす「人に逢はむつきのなきには思ひおきて胸走り火に心やけをり」という作もある。ここでも火は胸の上を走ってゆく。心を火に喩える表現は『万葉集』からあったけれど、小町の場合は仏教の思想や理論をあざやかに恋愛に転用した火と言えるだろう。

(小島なお)

